

国際協力特別賞

枯れ行く街に芽吹く一花

京都産業大学附属高等学校 3年
奥本 大也

「おはよう。」いつもと同じ一言で、いつもと同じ一日が始まる。外へ出て周りを見渡してみても、いつもと何ら変わりのない景色だ。立ち並ぶ一軒家、そびえ立つ高層ビル、工事の音、信号の軽快なメロディー。僕はこの景色が好きじゃない。いつから豊かな自然が人工に変わってしまったのだろうかと思うと心が痛むからだ。

そんなある日、僕宛に一通の手紙が届いた。僕の家からは少し離れた、田舎に住む祖母からだった。年に一度は訪れていた祖母の家も、ここ数年訪れていなかったため顔が見たくなかったのだろう。特に予定もなかった僕は、すぐに支度を済ませて家を出た。移り行く景色の中で、少しずつ大きな建物がなくなっていく。そして祖母の家に近づくにつれて車のエンジンの音が減っていき、轍さえも見当たらない。そのため小さい頃の僕にとって祖母の家は何もなく、退屈にしか思っていなかった。でも今となっては艶やかな花々が心地良い。都会の自然が失われていくため、より一層そう感じられるのだ。

少しして祖母の家に着いた。近況報告と昔の話をして和やかなひと時を過ごした。翌朝、小さい頃よく遊んでいた公園を一人で訪れた。浅めの砂場も錆びた遊具も何も変わっていない。この時一つ、ふと思い出したことがあった。近くの木の下を掘ると、やはり昔埋めたタイムカプセルが出てきた。中には「未来の僕へ」と書かれた封筒が入っていた。封筒を開けると一粒の種とまだ書き慣れていない大きな文字で「クローバー」とだけ書かれた手紙があった。一泊二日の旅を終え、なぜクローバーなのか思い出せず、疑問を解消できないまま家に種を持ち帰った。

翌日、僕はすぐにその種を持って近くの人気がなく、緑のない殺風景な土地へ向かった。その土地は今使われていなかったため、そこにクローバーの種を植えてみた。するとみるみる育っていき、量を増やし、一年が経った頃には辺り一面がクローバーに覆いつくされていた。それは「人のいないところでは自然は成長を続け失われない」ということを知るには充分すぎる光景だった。

何かが生きているということは、何かを犠牲にしなければならないということであり、当然何の犠牲も無しにとはいかない。それでもその犠牲を最小限に抑える努力は欠かしてはならない。一人ひとりが一花を大切に、自然に及ぼす影響を考えることができれば、この世

界はもっと自然に囲まれた豊かなものになるだろう。

それから時は流れ、枯れた土地は自然公園となり子供の遊び場となっていた。たった一つの小さな命がたくさんの命を作り出し、たくさんの笑顔を生み出したのだ。

今になって分かることだがこの花で笑顔を生み出し、世界に「幸運」をもたらす。これがきっと小さい頃の自分との「約束」でありクローバーであった理由なのだろう。

僕は今、街に植物を植えるボランティア活動を行っている。その成果が出ているのか少しずつ街に緑が増えている。それと同時に、もっとたくさんの笑顔が増えることを願っている……。

「おはよう。」またいつもと同じ一言で、いつもと同じ一日が始まる。でも外へ出て周りを見渡してみると、あの頃と同じ景色の中に、あの頃と違う変わった景色。立ち並ぶ一軒屋、そびえ立つ高層ビル、工事の音、信号の軽快なメロディー、風に揺れる木々の葉音。僕はこの景色が好きだ。これからもこの景色を、自然を大切に自然と共存していきたい。そして世界中のみんなが自然を豊かにしたいと心から思う。